

飛鳥寺講堂の調査 飛鳥藤原第143-6 次)

飛鳥寺中金堂の北方、来迎寺の塀新設に伴い講堂の西南隅を調査しました。講堂は50年前の調査で、桁行8間、梁行4間の四面廂付東西棟礎石建物で、玉石積みによる基壇外装をもち、周囲に玉石組の雨落溝があることがわかっています。

今回の調査では、南側柱の礎石を新たに3個検出し、以前確認していた1個も含め、調査区内にL字形に4個並んでいます。礎石の大きさは1.5mほどあり、径約80cmの柱座があります。柱間は、身舎部分で4.5m、廂部分では3.85mです。また、礎石据付掘形なども検出し、基壇の詳細な状況が明らかになりました。

中金堂に飛鳥大仏が安置されてから1400年、最初の調査で舍利埋納物が出土してから50年目にこのような壮大な遺構が姿を現したことは、感慨深いものがあります。一般の人の関心も高く、3日間の現場公開で約2100人が見学に訪れました。

(都城発掘調査部 玉田 芳英)



検出した大型礎石 西から)